

<研究ノート>

# 常陸国戦国期に生きた仏師の一例 — 府中住仏師真乗坊を中心に —

千葉 隆司\*

## A Sculptor of Buddhist Images of the Warring States Period of Hitachinokuni

Takashi CHIBA \*

戦乱が日常茶飯事にみられた戦国時代、宗教施設も巻き込まれることが多くなり、汁物・宝物なども戦利品の扱われることも少なくなかった。戦乱によって荒廃した堂宇や仏像などは、戦死した方々への供養もあって、宗教者の勧進活動によって得られた浄財で修復されていった。

仏像を制作・修復する職人に仏師がいる。常陸国府中に住む真乗坊は、戦国期に生きた仏師であり、その活動痕跡が窺える資料が3件確認されている。真乗坊が修復した仏像銘文からは、戦国期の人間社会がおぼろげながら知ることができる。

キーワード：戦国時代、常陸国府中、仏師真乗坊、職人、戦後処理

### 1 はじめに

戦国時代において、戦法として放火（村々の焼き払い）や狼藉（食料や家財の略奪）があった。戦場では、こういった行為が公然と行われ、まさに現代の大罪も野放しにされた状況であったのである。

中世において地域寺社は、「敵味方きらいなき公界」などといわれ、敵軍も神聖な中立地帯という認識をもち、襲うのをためらう施設であった。しかし、戦国時代も終盤を向える頃、状況は一変していく。各地で勃発する戦乱に宗教者も参加することも多くなり、織

田信長に代表される高野聖1383人の処刑、比叡山の焼き討ちなど相次いで宗教者や神聖なる施設も戦乱に巻き込まれていたのである。

このような行為は、信仰心の軽薄化として捉えられようが、それを変わらずの崇敬で見つめ、復興しようとする動きも当然のことながら存在していた。仏師は、自らのあるいは依頼者からの信念を汲み取り、仏像を制作・修復する職人という傍ら、時には開眼式（魂入れ）などの仏教儀礼なども行う宗教者という側面もあった。

かすみがうら市には、戦国時代末期に仏像修復を行っていた「府中仏師真乗坊」の痕跡

\* かすみがうら市郷土資料館、Hometown Museum of Kasumigaura City

が窺える仏像が3体ある。この稿では、「府中仏師真乗坊」の動向から窺われる当地の戦国時代末期の信仰文化の一端をみていくこととする。

## 2 仏師真乗坊の作例

### 2. 1 木造十一面観音菩薩坐像（かすみがうら市牛渡観音堂 写真1）

牛渡観音堂は、曹洞宗寺院の宝昌寺南西に隣接しており、以前は宝昌寺内に所在する一堂宇であった可能性が高い。本尊として木造十一面観音菩薩坐像が安置されており、8月17日の縁日の際に御開帳されている。本像は、1997年に茨城県立歴史館によって刊行された「茨城の仏像」に特徴が記されているので、それを引用してみる。「宝髻を高く結び、その頃に仏頂面を置く。地髪は低くそれに天冠台が緩い弧を描いて取り付いている。化仏は、天冠台に沿って左右三個、さらにその上段に左右一個が取り付き、正面と背面に化仏（ともに欠失）がつくようになっている。法衣は偏袒右肩で右足を上にして結跏趺座し、左手を胸前にあげて第三・四指を屈し、右手を膝上からややあげて第三・四指をやや内側に傾ける。衣文は形式化しており、膝前部分では褶が不自然な動きを呈している。宝髻は差込みで一材からとし、頭部を耳前で前後二材からとする。玉眼嵌入で前後とも内割りし、内部に銘文を墨書する。体幹部も同様に一材から彫出するが内割りはしない。膝前部は二材、左右の体側部を一材からとし、両裳先と両手首を矧ぐ。像底は削り上げ、両体側材と膝部の間に捕材をそれぞれ入れる。」とある。像高116.6cmを計る。制作時期は、南北朝時代と考えられている。頭内部には墨書銘文がある。

#### 【頭部前面】

佛師真乗坊 慶長八年癸卯三月 廿九日敬白

#### 【後頭部側面】

慶長八年癸卯三月廿九日 新五郎形部

#### 【後頭部】

記四郎しほちとら開山 奉造立時ノ住寺福永寺 満五郎 府中住佛師真乗坊  
しほち おは 源真房子形部神（カ）子 松賀 常林坊 小僧 痕子 ぬいの助 おいの助

銘文からは慶長8年（1603）3月29日に府中住仏師真乗坊がこの仏像に関わった事が読み取れる。おそらく連名される檀家の依頼で修復に携わったものと想定される。また、福永寺という寺院は当地を含め近隣では存在しないものである。福永寺の仏像として造立されたこと、制作年代が南北朝時代と考えることを含めると、福永寺なる寺院から、この観音堂に慶長8年に移され修復されたとも考えられる。

### 2. 2 木造宝冠阿弥陀如来坐像（かすみがうら市牛渡房中公民館 写真2）

牛渡房中公民館は、閑居山長栄寺跡である。長栄寺は、近代になって、同じ牛渡にある金剛寺に統合されたといわれる。現在では境内の数多くの石塔と共に仏像が館内で保管されている。さらに先の宝昌寺から配布された十一面観音の掛軸があり、以前は曹洞宗であった可能性もある。

木造宝冠阿弥陀如来坐像は、一木造・彫眼・彩色を呈する。紅顔梨阿弥陀の作例で、法衣は赤色となる。像高18.8cmを計る。仏像像底と台座に墨書銘文がある。

#### 【像底】

「別当慶□ 天正十九年辛卯五月□佛子 真乗坊」

#### 【台座上面】

「八郎兵衛 □□□ □□ 檀那 源兵衛 □□□」

本像も牛渡観音堂の木造十一面観音菩薩坐



第1図 仏師真乗坊関係仏像所在地分布図

1 西方八幡神社 2 牛渡観音堂 3 牛渡房中公民館

像と同様に、明確な意図した内容が理解できないが、天正19年(1591)に真乗坊が、別当慶□の依頼で地元庶民を檀那として制作したことが分かる。この像のほかに、木造十一面観音立像がある。一木造の素地で彫眼を施す。頭上面六面欠失全体に粗彫り、のみの痕

が残る。素人作と考えられる。像高39.6cmを計り、江戸時代末から明治時代の制作と思われる。また木造聖観音菩薩立像は、一木造・彫眼・古色を呈する。像高15.5cmを計り、江戸時代中頃から後半の制作と考えられる。



写真 1 - 1



写真 1 - 2



写真 1 - 3



写真 1 - 4

写真 1 木造十一面観音菩薩坐像（かすみがうら市牛波観音堂）

## 2. 3 木造阿弥陀如来立像（かすみがうら 市西方八幡神社 写真3）

西方八幡神社は、坂2856に所在する。社伝には、大同元年（806）の創建とあり、万治3年（1660）4月15日に宍倉城主菅谷氏が神像（木造高さ2.7寸）を奉納したとされる。古来は、流鏝馬神事が行われ、賑わいをみせていたという。ここには、木造仏像4体や神像1体が安置されている。

木造阿弥陀如来立像は、前後二材ではぎ合わせ。像高27.7cmを計る。前材・後材の胎内に次の銘文が墨書される。

### 【前材】

「キリーク 為逆修奉蓮華造次本願圓鏡坊  
良業六親從類七世父母タメ成  
及至自他無上菩提而已  
佛師府中真浄坊助力心  
慶長九年甲辰九月廿六日願主敬白」

### 【後材】

「有縁無縁靈玉魂出離生死 同佛子法傳  
干時永正十四年丁丑二月十二日  
常州南庄上石河松壺本尊起立願主俊暁阿闍  
梨 大檀那殿塚道泉範次  
同新五郎 妻子覚阿ミ 祐俊阿  
妙心禪尼二親七世父母六親眷屬等正覚」  
後材銘文が最初に記載されたものである。内容は、永正14年（1517）に常陸国南庄上石河（現在の石岡市石川）の松壺（地名かも知れない）の本尊起立を、俊暁阿闍梨が願主となって実施している。その檀那に殿塚道泉範次、新五郎、覚阿ミ 祐俊阿がいる。殿塚道泉範次は、いかなる人物であるか不明であるが、この時期に「範」の文字を名前に使用する武将に菅谷氏がいる。ここでも西方八幡神社ではなく、別寺院の内容がみられこの仏像が移動して、修復された可能性が高い。

その87年後の慶長9年（1604）に圓鏡坊が蓮華の生前供養を本願し、あわせて七世父母の供養を目的にしている。そこに府中の仏師

真浄坊が助力して、この仏像が奉納されている。

その他に、木造如意輪観音菩薩坐像がある。台座を含め一木造で制作され、六臂像であるが四臂が欠失している。総高35.8cm、台座幅19.6cmを計る。さらにご神体とされる騎馬武者像は、総高41.6cm、台座幅15.5cm、台座奥行き33.3cmを計る。また小型厨子に納められた木造弘法大師坐像がある。その厨子内側に「万治三庚子年 正月十五日 奉納 坂八幡宮 藤原氏 宍倉城主菅谷興岐二代 □法印権大僧都栄□」とある。社伝にいう「万治三年四月十五日に菅谷隠岐守が神像を奉納した」というのは、この弘法大師像をもとに作られた伝説と思われる。万治年間頃は、すでに菅谷氏政権は終了しているため、懐古した内容が受け取れる。

## 3 真乗坊以外の府中仏師

石岡市北根本薬師堂の木造阿弥陀三尊像の中尊に戦国時代末期の府中仏師の名が登場する。木造阿弥陀如来立像（像高59cm）の体部背面に長方形の内刳を施し、次の銘文が墨書されている。

### 【内刳内部】

府中之住人

佛師常福□宥□

天文十八年巳酉五月六

天文18年（1549）に常福□の宥□が本像を制作したことが分かる。

さらに、慶長16年には、浄光院に属する宥頭がいる。宥頭は、石岡市若宮にある十一面観音堂の本尊木造十一面観音菩薩立像の胎内銘文に登場する。平成15年（2003）の解体修理の際に発見されたもので、銘文は次のとおりである。

### 【前面材】

若子長命

大檀那六郷兵庫頭政慶



写真 2 - 1



写真 2 - 2



写真 2 - 3



写真 2 - 4

写真 2 木造宝冠阿弥陀如来坐像（かすみがうら市牛渡房中公民館）



写真3-1



写真3-2



写真3-3



写真3-4

写真3 木造阿弥陀如来立像（かすみがうら市西方八幡神社）

同氏女辰子

【背面材】

佛師浄光院宥顕

奉再興本願西光院宥玄

慶長十六天辛亥卯月吉日

国分寺千手院門葉阿闍梨

宥玄

慶長16年（1611）に大檀那六郷兵庫頭政慶が娘辰子の長命を願って修理を実施している。その際に、西光院宥玄が再興本願、国分寺千手院宥玄も参加している。

以上の二人の仏師が戦国時代から江戸初期にかけて府中に存在したと判断できる。この仏師は、いずれも「宥」という真言宗に多く見られる僧侶名の一字を有し、寺院名を伴うものであることから寺院に所属する仏師であると推測される。常福□（院或いは寺）の宥□と浄光院の宥顕という形であるが、常福（ジョウフク）は、該当する寺院名がみあたらない。浄光院（ジョウコウイン）は、府中中町組と守横組の2箇所のみられ、このどちらから宥顕が属していたものと推測される。

#### 4 戦国時代の府中職人

常陸国の政治・宗教など中心的な存在である府中は、交通の要衝でもあるため、当然のことながらかなりの人々の往来があった。定期市も開催され、府中は一大消費地として位置づけられていった。消費の裏側には、府中に集住する多くの職人もあり、僅かな資料からその様子を見ることが出来る。

戦国期には義通という甲冑師が技術改良を加えた甲冑を制作していたとされる。その作風は、早乙女派の家直、家忠に継承されていたものという。また、近世初期に長法寺政俊や吉貞という刀工が府中から輩出しており、中世にはその源流があったものと考えられる。長法寺は、現在の石岡市若松町に廃寺

跡があり、ここには製鉄遺跡も確認されている。寺院に属する刀工と推定される。

近世地誌である「府中雑記」には「今幸町ト云ウ所宝永年改ル往古土器屋ト云リ、其故ハ国府ナル故ニ古実ノ神事数多アリ、其時窪手平賀ナト云土器ヲ製セシ所也ト云ヒ伝フ」とあり、府中幸町（現石岡市幸町）には、神事などに使用される祭祀土器を製作する所があったことを記載している。日用雑器の土師質土器や瓦器などの製作も考えられ、このような土器職人が古くから（宝永年間以前）存在したことを窺わせている。

常陸総社には、機織の神とされる高房神社が合祀されており、付属の機織職人の存在が想定される。また、総社をはじめとした神社神事には御神酒が不可欠であるが、府中には古くから「府中六井」といった湧水に恵まれており、酒造業も中世には存在したものとと思われる。

これ以外にも、数多くの職人が府中には存在していたことであろう。僅かな記録のみではその足跡が限定されてしまうが、本稿で扱うような仏像胎内銘文など、今後の文献以外の資料によって少しずつ解明されていくものと思われる。

#### 5 烟田旧記にみる戦国期の仏像の取り扱い例

常陸国南部の戦国期の様子を窺い知る資料に烟田旧記がある。烟田旧記には、仏像が関連する記事が4箇所みられる。①「同年十一月廿日甲午破東ノ十二神入仏、寿徳寺よりノ入仏候也、初ハ一斗八升うり申候」、②「天文三甲寅十玉ヲかの仏つくりはしめ、始テ造申候時うはヲ幹信たき申候それをわすれす同としの四月三日西山宿地神別当十玉造候」、③「同十七しも水のかねヲ、中途までかつきいたし、同廿三日丙戌午刻当地へとりよせ被申候、七郎殿・六郎殿その外三百人やはきへ

御のけ候、同しも水わにくちも十七日とり、せんしゆきしん、同七月廿二日竹原二番メ若子江戸刑部大輔御名代御越候 甲申此角宿金用不叶日也、同とし十月十八日巳酉水用、竹原殿御閑居被成候)、④「同天正十四丙戌正月十六日、正龍ヲおし出し候て、青龍寺なをりあるへきよして、ししくらより被越候、折節がうこを被指懸候、漸百人の衆を立候て、正龍計寿徳寺滞留候て、いろいろのことハリ候へ共、すミ不申候て、十九一番鳥寺中こ悉々やきはらい候て、かつつミたん正寺へ阿弥陀御同心て、御ひらき被成候、はいをかき、寺へ青龍、同正廿四庚申御うつり候、正龍ハ午年正月十六日、寺へ御うつり、五ねんと申、正十九日御ひらき被成候あミたをとられ申候、其外かいさんみゑい前々よりの御いはい皆々やきやむり被成候、おつつミたんたん正方処へ御滞留被下候、同年六月十三日正龍弟子正作あミたをぬすミ申候て、寿徳寺へ入申候、十三日ハ丁丑水用、正作礼田一貫分所出申候」(下線筆者)とある。烟田旧記には、このように時期・場所を異にして仏像を取り扱った記事がみられる。内容は城下にあった烟田氏菩提寺の寿徳寺にまつわることが多い。寿徳寺は、現在も本堂・庫裏が銚田市烟田に所在し、烟田城主の墓と伝える五輪塔も境内に安置されている。曹洞宗に属する寺院であるが、古くは薬師堂もあり、薬師信仰も盛んであったことを窺わせている。旧記にも薬師如来の守護神である十二神将が寿徳寺から他寺に移される内容がある。また寿徳寺に梵鐘・鰐口・千手観音・阿弥陀如来などを他の寺院から移動させる記事もみられる。このように戦乱のどさくさに紛れて、自らの菩提寺に他寺から仏具や仏像を持ち込むことは当時の、汁物・宝物の取り扱いや信仰の形態を窺わせるものとして興味深い。さらに寺院内の開山堂や御影堂そして、前々からの位牌までも焼き払う心境は、信長の比叡山焼き討ちなどと同様に、信仰心を微塵も感じさせな

いことであるが、列島内では普通に行われていたことであった。戦乱により、堂を焼かれたり、仏像を破壊・盗難されることが多かった戦国期に活動を活性化させた職人の一人が仏師といえそうである。

## 6 小結

仏師は、仏像を造る職人であるから、寺院に所属するなど従属関係が結ばれることが多かった。また、中世においては、職能が分化する時期でもあったので、個人が経営するものも存在し、やはり僧形を普通とした。真乗坊も、その名前から察するに僧形をしていたと考えられる。しかしながら、前述した府中浄光院仏師のように寺院名を冠することがみられないことから、個人経営の仏師とも考えられる。真乗坊は、府中に住し、賑わいをみせていた中世都市を本拠地に活動を展開していたが、戦後処理としても仏像修復に当たった仏師なのであろう。出島地方は、小田支配下の宍倉領に属していたが、天正元年の佐竹義重による攻撃で灰燼に帰している。宍倉領内の寺院は、かなり荒れたことであろう。その荒れた中であつた宗教施設として仏像の復興・修復が試みられたのであつた。

仏師真乗坊には、「真乗坊」、「真浄坊」と2通りの記載がある。それらは府中という地名を付けるものと付けないものがある。付けるものは府中に住む、府中の仏師であることを強調するものと捉えることができ、府中という名前を冠することは一つのステータスシンボルの且つブランド的なことであつたとも考えられる。

仏師真乗坊は、天正19年(1591)5月、慶長8年(1603)3月29日、慶長9年(1604)9月26日の13年間の短期間の中で仏像3体にその活動痕跡を窺わせている。慶長8年、9年のものには、いずれも他寺院名が記されており、移動した仏像の可能性が高い。これら

以外にも当地域での痕跡が窺える資料が今後増加する可能性もあり、それによって仏師真乗坊そして当時の宗教環境がより鮮明に描けるものと思われる。

さらに牛渡房中公民館の仏像は、仏師真乗坊が制作したと考えられるが、牛渡観音堂や西方八幡神社は、修復に従事していたものであった。これらの仏像は、阿弥陀や観音といった浄土系の仏像であり、銘文の内容も浄土を求める願いがみとれる。さらに、牛渡房中公民館の阿弥陀は、珍しい紅顔梨阿弥陀であり、想像をたくましくすれば仏師真乗坊は、密教念仏系を重視する半僧半俗の仏師と位置づけられる人物と考えられる。

## 7 おわりに

近年、近親者への殺人行為が日常茶飯事のように生じている。現代社会が効率化・合理性とって経済中心世界に重きをおけばおぼほど、金銭のみが頼れる存在となり、人間同士の関係を軽薄化するばかりに自己中心的な人間像を増加させる傾向となる。そこには、近親者とのコミュニケーションを通じた精神安定を図ることも薄らぎ、ましてや信仰心から生じる宗教への依存も存在するすべもない。心の拠り所となる近親者との関係も築けない社会になったのも、人を信じるといった一つの信仰心が薄れただけ結果ではなかろうか。

わが国の信仰の核とされる現世利益と祖先崇拜は、直接結果を受けられる現世利益のみが生き残っていつているといえる。極端に言えば個人欲得につながる現世利益行為は、現代社会にあっていつているといえる。それに対し、

祖先崇拜は核家族の進行、離婚の多発化など日本の家庭環境の崩壊によって、面識のない遠い先祖を祭ることへの意識低下を招いていつたのである。自らの祖先を意識しないのであるから、氏神そして地域の産土神、菩提寺・旦那寺などへの崇敬は、急速に薄らぐ状況となる。祖先崇拜は、中世の時期に一族を団結させるのに重要な要素であった。その祖先を供養し、今に生きる世代および以後の子孫の安定を図る信仰世界も菩提寺が作り出し、人々の心の拠り所となっていた。戦乱によって、自らの菩提寺・祈願寺が荒廃し、打ち捨てられた仏像を目の前にした人々は、その信仰心から浄財を寄進し、修復していつたのである。この祖先崇拜の信仰心には、自己中心的な心情はなく、近親者及び一族が協力し合い、助け合う心情を育ませる力もいつたのである。

近親者への信頼、宗教への信仰心が軽薄化した現在、人々の心は拠り所を持たないまま子供から大人へと成長する環境を作り出している。このような環境は、心の荒廃を進行させ治安維持国日本の崩壊を促す一つの動力と化していると考えられる。いち早く、信仰心を見つめ直す機会を設け、人間性あふれる精神文化を再構築していきたい。歴史を研究する一人として、今後も現代社会に失われた日本人が日本人として必要な要素を、積極的に歴史の中から汲み取ることに努めることを誓い、筆を置くこととする。

府中仏師について石岡市教育委員会学芸員木植繁氏、姻田旧記の解釈については、茨城県立歴史館首席研究員飛田英世氏にご教授いただいた末筆ながらお礼申し上げる次第である。